



アイデア・スピード・バイタリティ

住友金属鉱山(株)東予工場



別子の歴史に触れようと、別子銅山記念館を訪れる。別子銅山の貴重な資料を展示する同記念館・佐藤豊館長は、「ご案内いただきながら」と言われる。



別子銅山記念館 佐藤館長

大工場が立ち並ぶ海岸ぎわに出ると、ひとつの石碑にぶつかると、「口屋跡」とある。ここは工都新居浜の原点であり、元禄十五年(1700)から明治二十二年(1889)まで銅山関係物資輸送の窓口となり、「ここから長崎出島を経由して海外へ銅が輸出されていた。世界一の産銅国であった日本を今に伝える石碑である。

■あちこちに残る産業の足跡

また、おもしろいものが現れた。急停車！、入替時間朝・昼・夕 一日三回お届けします。十五個二百円 うみたてたまご。街道沿いに設置された「卵自動販売機」である。ちなみに若鶏の卵は五円高い。

暖冬だといつのに、めずらしく寒い日に当たっていました。松山空港に降り立つと暖かい四国のはずが、底冷えがキツイ。瀬戸内を隔てた対岸の広島は雪だという。四国版装備しか用意しなかった取材班、「あと一枚のセーター」を望んでも後の祭り。車で路東へ向かう。一時間ほどで松山自動車道を抜け、新居浜に着く。市内を走ると、東京では見たことのない交通標識にぶつかった。自転車が一列並んでいる。わが国の銅産業発祥の地である別子の懐、新居浜ならではの標識という。通勤の際、この町には工場に向かい、そして

はき出される自転車であふれかえる。その時間帯だけ、複数列運転が許されるのだという。自転車優先だ。日本でもこの町だけにしかない標識である。

この施設は、別子銅山の意義を永く後世に伝えようと作られた。別子の歴史に触れようと、別子銅山記念館を訪れる。別子銅山の貴重な資料を展示する同記念館・佐藤豊館長は、「ご案内いただきながら」と言われる。

車を下りてちよつと歩いて見る。足下を流れる足谷川の流ればあくまで澄み渡っている。山ぎわへはりつくように立っているのが、明治四十五年に建設された旧水力発電所である。約六百メートルの落差で発電したといわれ、赤レンガの建物の影から、「ゴーター」という落水の激しい音が聞こえてきそうである。川沿いに進むと錆びに染まった小さな鉄橋にぶつかる。四通橋である。橋にはレール跡が見られ、その先には第四通洞と呼ばれる赤レンガの小型凱旋門のようなアーチ状の入口

ました。グループ学習の生徒さん初老のご夫婦、ライフワークとしてわが国の産業遺産をめぐり歩く人など毎年、全国から多勢の人たちに来ていただいています。別子の果たした役割に納得して帰っていただいているようです。



新居浜ならではの道路標識



遠く霊峰「石鎚山」を望む



卵自動販売所



古くは銅を出荷した「口屋跡」



旧別子銅山・水力発電所跡



かつての大動脈・第四通洞

がある。閉山まで使われていた別子銅山の不動脈で、その奥の坑道は長さ四・六キロにも及んだという。このほかにたくさんの産業遺跡があり、人々を賑わいの時代に連れ戻してくれる。

この端出場の奥にも、旧別子の名残を残す地があるが、凍結も考えられるとのこと。ここで引き返すことにした。



尾島工場長

急ピッチで進む四大プロジェクト

別子銅山にはじまり、今日まで新居浜の産業を支えてきたのが、住友金属鉱山(株)および同東予工場である。

東予工場は、当時としては最先端の自熔炉による製錬法を導入するため、昭和四十四年建設が開始され、四十六年に完成している。その後時代とともに設備増強を図ってきたが、今、またこれまでにない増強計画が進められている。

尾島康夫工場長はこう口火を切られた。

この工場は三十三年の歴史を持ちますが、始まって以来といつてもいい四つの大型建設プロジェクトが進んでいます。そのひとつが製錬設備の増強、さらに電解ライン、硫酸製造設備、貴金属プラントの増強で、いままさにこれらのプロジェクトが進みつつあります。それぞれが十年に一度あるかないかの大型プロジェクトです。それが四つ同時期に集まってしまうと、たいへんですが、とてもやりがいがあります。

とりわけ自熔炉の改修はたいへんでした。炉のレンガとジャケットの改修が中心でしたが、通常なら三〜四か月かかるといわれた工程を四十八日間やり遂げました。この間操業できないわけですから、できるだけ効率よく、短期間で済ませるために徹底した事前調査を実施しました。二十回以上海外に人を送り、また五十回以上海外から人を招きました。社員の協力もあり、画期的な短期日で終えることができました。この間、日延べ千人、五万人が投入されました。今、工場のかかげる「アイディア・スピード・バイタリティー」というスロガンを地でゆく工事となりました。

世界一きれいな製錬所をめざして

これらのプロジェクトは二〇〇六年には完成する見込みですが、そのときには銅地金生産量は、年間四十二万トン体制に、その二年後くらいには四十五万トン体制を予定しています。硫酸製造設備は完成し、硫酸生産能力二四四万トンという世界トップクラスの設備を有することになりました。独自のプロセスを開発した貴金属精製プラントも金生産能力年間六十トンという世界有数のラインができ上がりました。もちろん、こうしたラインの効率化、集約化とともに、組織や人員の集約化をはかり、国際競争力のいっそうの向上に努めています。

この計画を進めるにあたって、つくづく感じたのは先人の偉大さです。先々のことを考え工場をレイアウトしていったんです。必要となると思われるところに余分なスペースを設け、設計していた。これにはうなりました。

東予工場をひとまわりしてみると、緑の多さ、清潔さに驚かされる。これについて金属事業本部東予工場 青野貞二課長はこう言われる。

よく外から来られた方が、工場内を見て、「製錬所らしからぬ清潔さだ」と言われます。環境保全・整備への努力は、当工場の伝統のようなもので、社員のひとり一人が心掛けています。ときどき先輩が来所されますが、「口酸っぱくおっしゃるのは、木は本も枯らすな」ということ。企業にとって環境問題は欠くことのできない大きなテーマになっていますが、私たちは「世界一きれいな製錬所」をめざして毎日努力しています。

尾島工場長は最後にこう結ばれた。

私たちが培ってきた環境対策技術を社会に還元することを多角度から考えています。そのひとつが銅生産工程で発生するスラグをコンクリート材料となる海砂の代替材として利用することです。また、



青野課長

東予工場の環境対策技術は国内にとどまらず、中国、インド、パキスタン、オーストラリアにも技術輸出しています。工場の中央に設けられた横断幕「アイディア・スピード・バイタリティー」が強く印象に残る東予工場であった。

工場玄関のロボット・トヨ君



硫酸製造プラント



清潔で緑の多い工場内



積み上げられた電気銅